六　山城跡の発掘調査成果
―傘松城跡を中心に―

石川　蕗

一　はじめに

国史跡の江馬氏城館跡は下館跡のほか、本城の高原諏訪城跡をはじめとした六つの山城群が含まれる。現在、県指定である傘松城跡は江馬氏城館跡には含まれていないが、近年実施された岐阜県中世城館跡総合調査で江馬氏関係の山城跡としての位置づけがなされた（岐阜県教育委員会二〇〇五）。それをふまえ、市では江馬氏城館跡への追加指定を進めている。二〇一八年には赤色立体地図を作成して（飛騨市教育委員会二〇一八）それをもとに現地調査を実施し縄張り図を作成した（大下永二〇二一ｃ）。二〇二〇年には倒木の被害状況確認のための発掘調査を行った（飛騨市教育委員会二〇二〇ａ）。今回はそれらの調査成果をまとめることを目的とする。

二　傘松城跡について

（一）地理的概要

傘松城跡は飛騨市神岡町吉田・寺林・釜崎に位置する観音山の山頂に築かれた山城である（図１）。主郭の標高は八〇三ｍで、下館跡との標高差は約三五〇ｍとなっている。主郭からは本城の高原諏訪城や下館跡、東町城跡等をとらえることができる。周囲の山城の中には直接見ることができない山城もあるが狼煙を使って連絡をとることは可能であったと考えられる（大下永二〇一九）。また、西側には越中東街道、南側には吉田街道が通っている。古川盆地から高原郷へと通じる街道であり、敵対関係にある古川盆地を拠点としていた姉小路氏・三木氏の侵入を防ぐという軍事的にも大きな役割を果たした。このように傘松城跡は周囲の城館や街道との位置関係から、江馬氏の領域支配に最適な立地であったといえる。

（二）歴史的背景

傘松城跡に関する史料は残っていないが、薬師堂の懸仏の金石文銘により永仁七年（一二九九年）の築城と伝わる。戦国時代に江馬氏は古川を治めていた姉小路氏と対立していたことが文献から分かっている。このように戦国時代の飛騨地域では政治的緊張が高い状況であったことが想定される（大下永二〇一九）。詳しい歴史的変遷は一章で詳述されているためここでは省略するが、このような戦いが続いた時代において傘松城跡は軍事的役割を果たしていたことが推測できる。

ところで傘松城跡の名称は城の南側に位置する吉田地区の「字傘松」という地名が由来と考えられる（大下永二〇一九）。明治初期に作成された「神岡村吉田組絵図面」には「字カラカサマツ」とあり、元々はそのように呼ばれていたと考えられる。戦国時代には北尾根を経由して主郭に登城したと考えられるが、近世以降は「吉田城」「傘松城」という名称から南側の吉田地区の城山としての位置づけが高まったと想定される。

（三）赤色立体地図から見た遺構

二〇一八年に赤色立体地図を用いて現地踏査を実施し、遺構の詳細な構造をとらえることができた（大下永二〇一九）（図２）。傘

図 1　傘松城跡周辺関連要素位置図（大下永 2019 より）

松城跡では主郭に続く尾根上に敵の侵入を防ぐ階段状の曲輪群や虎口・横堀・土塁等の遺構が集中している。主郭は東西約二十五ｍ、南北約三十五ｍという傘松城跡で最も広い曲輪である。主郭の北側には土橋のついた堀切があり、北側へはその土橋を渡っていくことができる。南側には斜面が広がり、竪堀と小規模な平坦地が多数確認できる。西側には曲輪が階段状に続いている。

最西端の遺構は主郭から約三〇〇ｍ進んだところにあり、堀切や土塁に囲まれた曲輪が存在する。この曲輪は竪堀や堀切が設けてあり、西側からの侵入における最初の遮断線となっている。主郭から城郭範囲最西端の曲輪までは二つの大きな堀切が存在している。西側の尾根に最も遺構が集中し、西方向の守りを固めていたことがうかがえる。西側には古川盆地へつながる峠や街道が続いており、古川盆地を治めていた勢力の侵入を警戒していたと推測できる。

主郭から北側二〇〇ｍの尾根上には昭和の頃に設置された放送施設によって改変を受けているが曲輪や堀切が確認できる。その他に堀切や竪堀、土塁状の遺構が認められる。北尾根は主郭への連続性が高いことから、城兵の導線上に位置し、主郭地区と一体で機能していたと考えられる。

主郭から南東に延びる尾根上の遺構は他の尾根と比べ遺構の数は少ない。南東における城郭範囲の端では小規模な平坦地がみられる。その北側には曲輪が三つ続きまた小規模な平坦地が存在する。そして、両竪堀を経て主郭へ到達する。

主郭南側は他と比べ遺構の数は少ないが、時期が判然としない小規模な平坦地を確認できる。その平坦地の西側には竪堀が存在し、西側の堀切から主郭側へ回り込まれないようにするために設けられたと考えられる。

このように赤色立体地図による分析から詳細な遺構の構造を検討した。さらに飛騨市では、より細やかに城郭遺構を把握するため、現地踏査の成果をもとに縄張り図を作成した（大下永二〇二一ｃ）（図３）。

三　発掘調査について

（一）遺構と遺物の概要

傘松城跡では二〇一八年の台風被害によって多くの倒木が発生した。これらの倒木による遺構への影響を確認するために二〇二〇年に発掘調査を行った。発掘調査状況は図４にて示す。発掘調査は倒木のあった箇所を中心に全部で十二か所のトレンチ（試掘坑）を設定し（図３）、遺構の残存状況を確認した。遺物はいずれのトレンチでも出土しなかった。

（二）各トレンチの調査状況

①一号トレンチ

一号トレンチは城域西端にある曲輪と土塁にかけて三ｍ×一・五ｍで設定した。腐葉土直下で地山を検出した。この地点の曲輪は地山を削って平坦地としていることを確認した。

②二・三号トレンチ

二・三号トレンチは土塁と大きい堀切の斜面・堀底にかかる部分に設定した。それぞれ三・五ｍ×二ｍと五×三ｍである（図５）。二号トレンチでは何層にも堆積しており、土塁造成のための盛土と推定できた。三号トレンチでは一ｍ以上に及ぶ何層もの崩落土が堀切の堀底に堆積していることを確認した（図５）。さらにその崩落

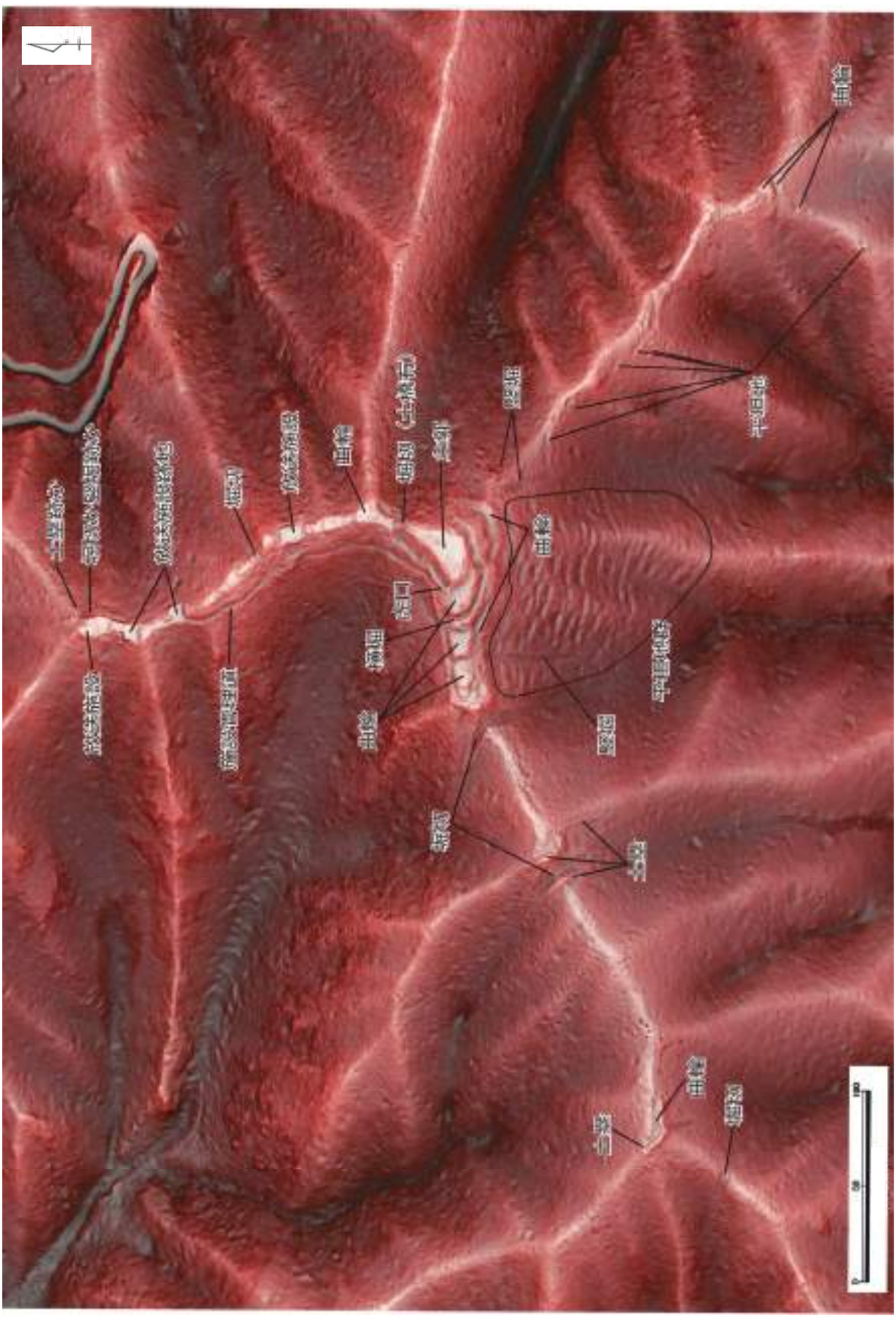


図２　赤色立体地図からみた主な遺構（大下永 2019 を一部改変）

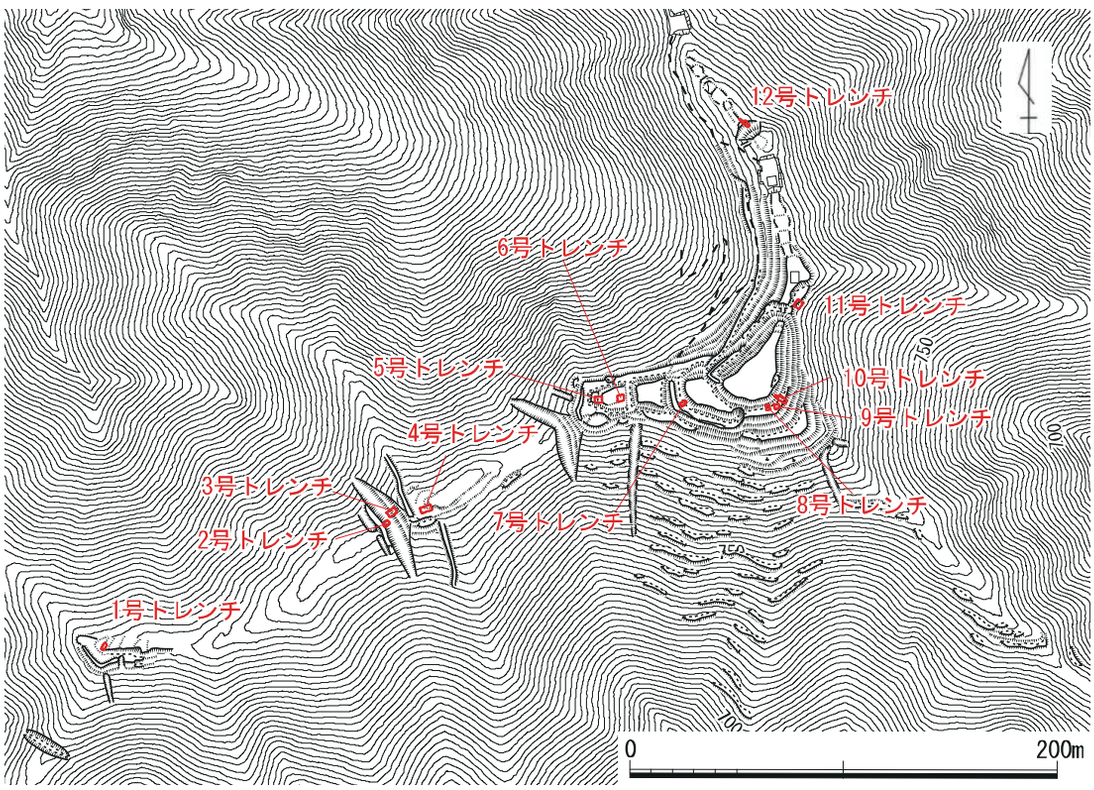


図３　トレンチ位置図

土の下に埋まっている堀切の底は、発掘調査では確認することができなかった。この堀切の高さは地表面観察において約七・五ｍであったが（飛驒市教育委員会二〇一九ａ）、発掘ではさらに一ｍ以上の高さがあることが判明した。

③四号トレンチ

四号トレンチは堀切の土塁から平坦地にかけて五ｍ×二・五ｍで設定した。トレンチ中央部は倒木した根の撹乱を受けていたが、腐葉土直下で地山を検出した。

④五・六号トレンチ

五・六号トレンチは主郭から西側に階段状に続く曲輪に設定した。それぞれ、五×二・五ｍと二・五ｍ×二・五ｍである。五号トレンチでは表土下に曲輪造成土を確認した。六号トレンチでは表土下に自然の堆積土を確認した。そのため、六号トレンチを設定した曲輪は掘削による造成が行われ、その土を五号トレンチの曲輪へ運び平坦地を造成したと推定できる。この二つは同じ曲輪でも造成方法が異なった。両トレンチの間には、土の切り盛りが行われた境目があることが想定できる。

⑤七号トレンチ

七号トレンチは主郭西側の堀切に二・五ｍ×一・二ｍで設定した（図５）。地山を掘りこんで横堀が造成されていることを確認した。その横堀は崩落土で埋まっていた。その崩落土内にさらに掘りこみを確認した。この掘り込みは深さが二〇㎝程度であり、比較的浅い。トレンチの西側の土塁について、三層の盛土を確認した。先に土塁の端に九層を盛土し、次にその中央のくぼみに八層を埋め、さらにその上に七層が埋まっているように観察できる。これは野口城跡の

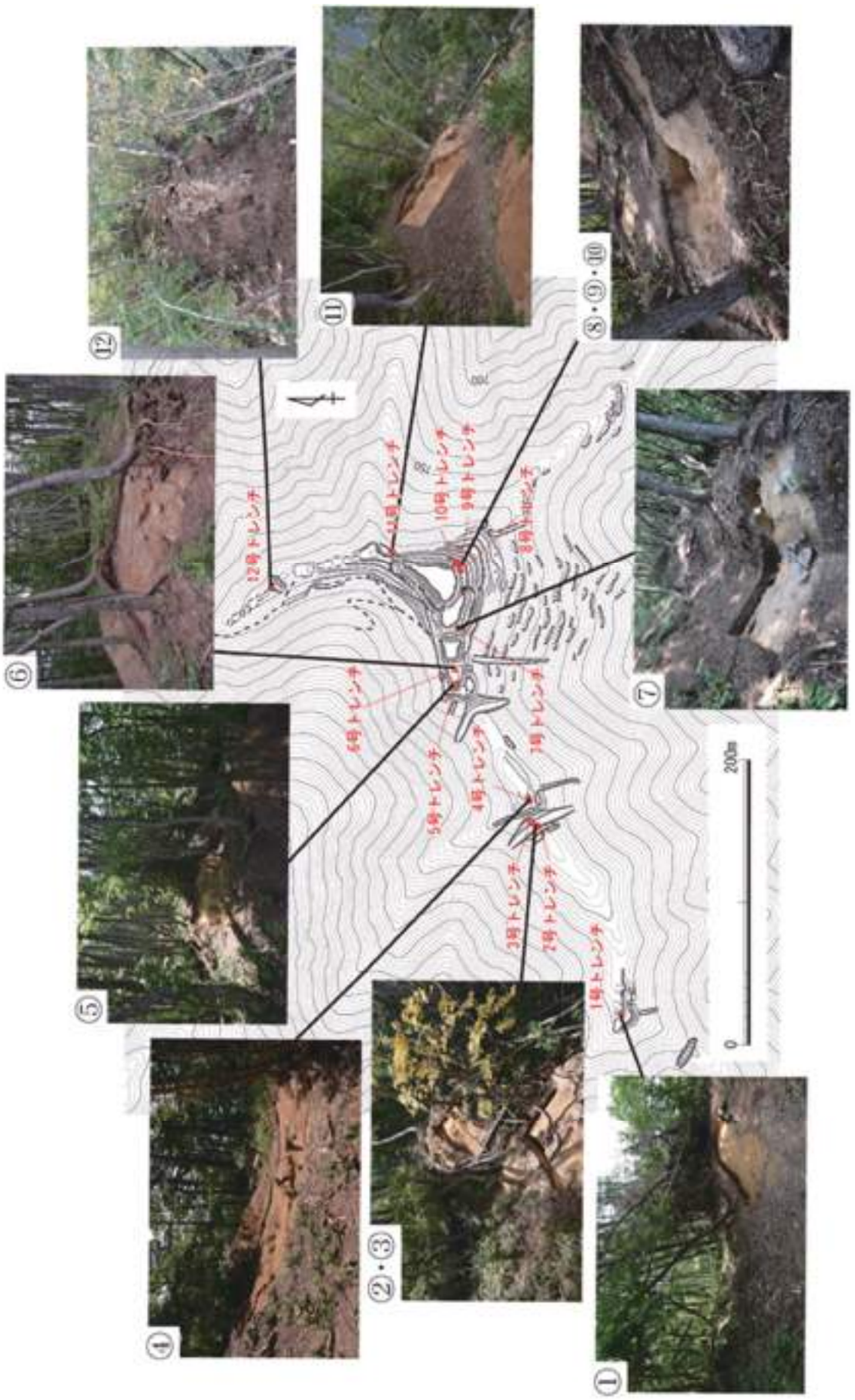
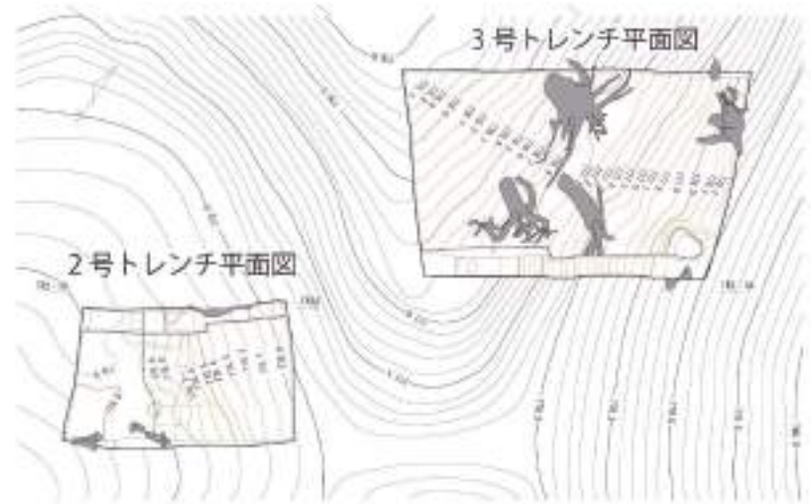
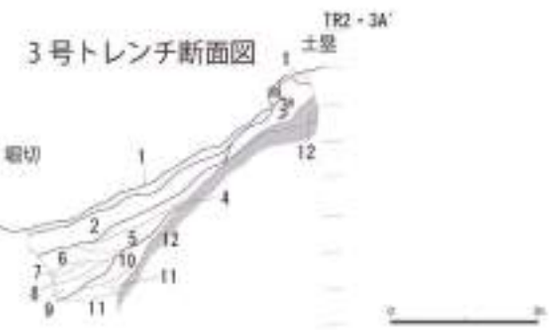


図４　各トレンチの発掘状況



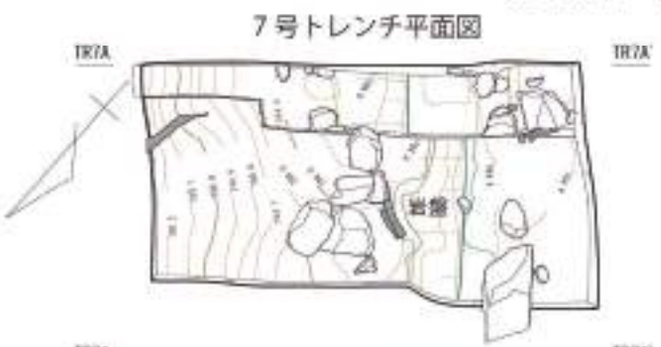


2号トレンチ土層説明

1	10YR3/4	暗褐色粗粒砂	[腐葉土]
2	10YR5/6	明黄褐色中粒砂	[崩落土]
3	10YR5/6	黄褐色粗粒砂	[盛土]
4	10YR6/8	明黄褐色粗粒砂	[盛土]
5	10YR6/8	明黄褐色粗粒砂	[盛土]
6	10YR6/8	明黄褐色粗粒砂	[盛土]
7	10YR6/8	明黄褐色粗粒砂	[盛土]
8	10YR6/8	明黄褐色粗粒砂	[地山]

3号トレンチ土層説明

1	10YR3/3	暗褐色粗粒砂	[表土]
2	10YR7/6	明黄褐色中粒砂	[崩落土]
3	10YR6/6	明黄褐色中粒砂 5mm大の礫混じる	[崩落土]
4	10YR6/6	明黄褐色粗粒砂 5mm大の礫混じる	[崩落土]
5	10YR6/6	明黄褐色粗粒砂 5mm大の礫混じる	[崩落土]
6	10YR6/6	明黄褐色礫	[崩落土]
7	10YR5/6	黄褐色中粒砂	[崩落土]
8	10YR6/6	明黄褐色粗粒砂 5mm大の礫混じる	[崩落土]
9	10YR5/6	黄褐色礫 1cm大の礫混じる	[崩落土]
10	10YR5/6	黄褐色中粒砂	[崩落土]
11	10YR5/6	黄褐色中粒砂 1cm大の礫混じる	[崩落土]
12	10YR8/3	浅黄橙色岩盤	[地山]



7号トレンチ土層説明

1	10YR3/2	黒褐色粗粒砂	[腐葉土]
2	10YR4/2	灰黄褐色中粒砂	[埋土]
3	10YR6/4	にぶい黄橙色中粒砂 5mm大の礫混じる	[崩落土]
4	10YR5/8	黄褐色中粒砂 5mm大の礫混じる	[崩落土]
5	10YR6/6	明黄褐色中粒砂	[崩落土]
6	10YR5/6	黄褐色中粒砂	[崩落土]
7	10YR7/6	黄褐色中粒砂 5mm大の礫混じる	[盛土]
8	10YR6/6	黄褐色中粒砂 5mm大の礫混じる	[盛土]
9	10YR7/6	黄褐色細粒砂	[盛土]
10	10YR8/4	浅黄橙色岩盤	[地山]

図５　２・３・７号トレンチ平断面図

畝状空堀群の土塁構造と類似している（三好清超二〇一一ｃ）。

土塁の基底部には礫が入り土留めに用いたと推定できる。また、横堀の底にも礫が入り、土留めの転石と想定できる。

⑥八・九・一〇号トレンチ

八・九・一〇号トレンチは主郭南側の曲輪に並んで設定した。それぞれ二×一・五ｍ、二×二ｍ、五×二ｍである（図６）。地山を掘りこむように横堀が造成されていることを確認した。この横堀は主郭を取り囲むよう設けられている。これにより、これまでに判明していた北側と西側と合わせて三方向に横堀がめぐっていることになり、主郭を堅牢に守っていたことが想定される。

⑦一一号トレンチ

一一号トレンチは主郭に隣接する北側の平坦地から東側急斜面に沿って二・五ｍ×二・五ｍで設定した。崩落土・盛土・旧地表土を確認した。盛土によって平坦地とその斜面が造成された状況を見てとることができた。

⑧一二号トレンチ

二号トレンチは北尾根の堀切から土塁にかけて二・七ｍ×一ｍで設定した。トレンチ南側は堀切の埋土が広がることを確認した。さらに最下層には山の岩盤を確認した。岩盤を削り出して堀切と土塁を造成したと推測できる。

四　市内の山城との比較

飛驒市内には神岡町の江馬氏城館跡以外にも多数の山城がある。そのうち古川町にある姉小路氏城館跡（古川城跡、小島城跡、野口城跡、小鷹利城跡、向小島城跡）（図７）では国指定を目指した発掘調査を実施している（飛驒市教育委員会二〇一八ａ・二〇一八ｂ・二〇一九ｃ・二〇一九ｄ・二〇一九ｅ・二〇二〇ｃ）。遺構は主郭において古川城跡や小島城跡、小鷹利城跡では礎石建物跡を、野口城跡や向小島城跡では掘立柱建物跡を構成する柱穴や土坑を確認した。遺物は五城で点数に差はあったもののいずれも土師器皿や瀬戸美濃焼等が出土した。

傘松城跡においては主郭の調査を行っていないため単純な比較はできないが、現時点でできる限りの比較を行いたい。

まず城郭遺構について整理する。古川城跡や小島城跡の調査において織豊系と推測された石垣を確認した。一方、今回の傘松城跡の調査では石垣を確認していない。そのため、傘松城跡は織豊期まで使用されていなかった可能性がある。

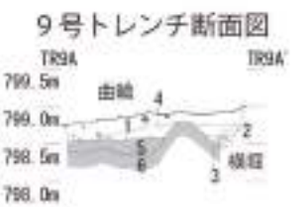
また、傘松城跡では畝状空堀群を確認できないが、野口城跡、小鷹利城跡、向小島城跡では確認できる。畝状空堀群とは複数の竪堀を連続して設けた遺構である。土塁の造成について野口城跡では先に土塁の両側に盛土を施し、次にその両側の中央を埋めるという工程を繰り返していた。傘松城跡の七号トレンチでも同様な土塁の盛土を認識し、この二城で造成技術の類似点がみられる。

古川城跡等では人が山上に滞在できるような施設が確認でき、土師器皿が出土していることから饗応の場がもたれたと想定される。傘松城跡でも主郭における将来的な調査によって滞在的利用が想定できるかもしれない。

姉小路氏城館跡の調査は、傘松城跡における今後の調査にあたって参考にすべき点が多い。より広域的な視点で飛驒の山城のあり方を検討する必要がある。

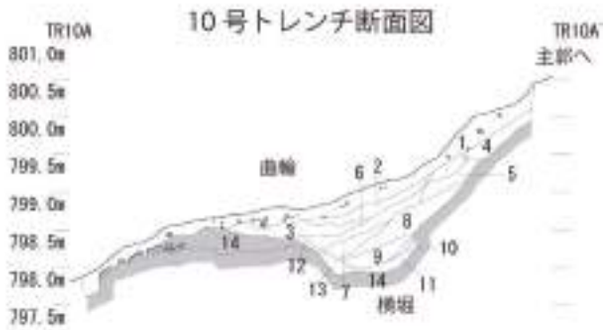
9号トレンチ土層説明

1	7.5YR3/3	暗褐色粗粒砂	[腐葉土]
2	10YR7/6	明黄褐色粗粒砂	[埋土（第1段階）]
3	10YR7/4	にぶい黄橙色粗粒砂	
		しまりわるい	[埋土（第1段階）]
4	10YR7/8	黄橙色粗粒砂	[埋土（第1段階）]
5	10YR7/3	にぶい黄橙色粗粒砂	[埋土（第1段階）]
6	10YR6/4	にぶい黄橙色粗粒砂	[埋土（第2段階）]
7	10YR6/2	灰黄褐色粗粒砂	
		しまりよし	[埋土（第2段階）]
8	10YR6/1	褐灰色粗粒砂	
		しまりよし	[埋土（第2段階）]
9	10YR5/1	褐灰色粗粒砂	[埋土（第3段階）]
10	10YR7/2	にぶい黄褐色中粒砂	[埋土（第3段階）]
11	10YR7/3	にぶい黄褐色中粒砂	[埋土（第3段階）]
12	10YR8/8	黄橙色粗粒砂	[自然堆積土(堀機能時)]
13	10YR7/8	黄橙色粗粒砂	
		しまりわるい	[曲輪造成土]
14	10YR6/8	明黄褐色岩盤	[地山]



8号トレンチ土層説明

1	7.5YR3/3	暗褐色粗粒砂	[表土(腐葉土)]
2	10YR6/6	明黄褐色粗粒砂	[埋土]
3	10YR6/4	にぶい黄橙色粗粒砂	[埋土]
4	10YR8/3	浅黄橙色粗粒砂	
		しまりわるい	[曲輪造成土]
5	10YR8/8	黄橙色粗粒砂	[地山]
6			[地山岩盤]



10号トレンチ土層説明

1	10YR2/3	黒褐色粗粒砂	[腐葉土]
2	10YR5/6	黄褐色粗粒砂	
		5mm大の礫混じる	[崩落土/埋土]
3	10YR5/8	黄褐色極粗粒砂	
		5mm大の礫混じる	[崩落土/埋土]
4	10YR7/4	にぶい黄橙色粗粒砂	
		しまりよし 5mm大の礫混じる	[崩落土/埋土]
5	10YR7/6	明黄褐色粗粒砂	
		しまりよし 5mm大の礫混じる	[崩落土/埋土]
6	10YR4/6	褐色極粗粒砂	[崩落土/埋土]
7	10YR6/6	明黄褐色極粗粒砂	[崩落土/埋土]
8	10YR7/6	明黄褐色中粒砂	
		しまりよし 5mm大の礫混じる	[崩落土/埋土]
9	10YR5/8	黄褐色極粗粒砂	
		しまりよし 5mm大の礫混じる	[埋土]
10	10YR6/6	明黄褐色中粒砂	
		5mm大の礫混じる	[自然堆積土]
11	7.5YR5/8	明褐色中粒砂	
		5mm大の礫混じる	[自然堆積土]
12	7.5YR6/8	橙色中粒砂	
		5mm大の礫混じる	[自然堆積土]
13	7.5YR6/8	橙色極粗粒砂	
		5mm大の礫混じる	[自然堆積土]
14	7.5YR6/8	橙色岩盤	[地山]

図６　８・９・10号トレンチ平断面図

図 7　古川町内の主な山城跡

五　おわりに

傘松城跡は周辺の山城や街道を見通せる立地であり、江馬氏の領域支配の拠点として大きな役割を果たした。赤色立体地図や縄張り調査によって城域に広がる遺構の詳細な構造を把握することができた。遺構は特に古川方面にあたる西側に集中しており、当時、古川盆地の勢力を警戒していた状況が想定される。

発掘調査では一部倒木の影響を受けている場所があったが、比較的良好に遺構が残っている状況を確認した。また、今回の調査では新たに主郭直下の南東に横堀が設けられていることを確認した。さらにこれまで約七・五mと認識していた堀切は、さらに堀底が一m以上地中に埋まっている状況が明らかとなった。以上のように発掘調査によって主な遺構の規模や造成に関する新たな知見を得ることができた。これらの遺構は江馬氏の本城である高原諏訪城跡に匹敵する規模であり、迫力のある江馬氏の城づくりを見てとることができる。

さらに飛騨市内の山城と比較することによって、中世の飛騨における支配勢力の関係性が浮かび上がり、同じ飛騨市内でも異なった特徴を見出すことができる。ただし、傘松城跡の発掘では遺物を確認していないために明確な年代が判然としない。また、主郭において発掘調査を行っていないため、将来的に主郭の調査を実施することで、新たな知見を得られる可能性がある。